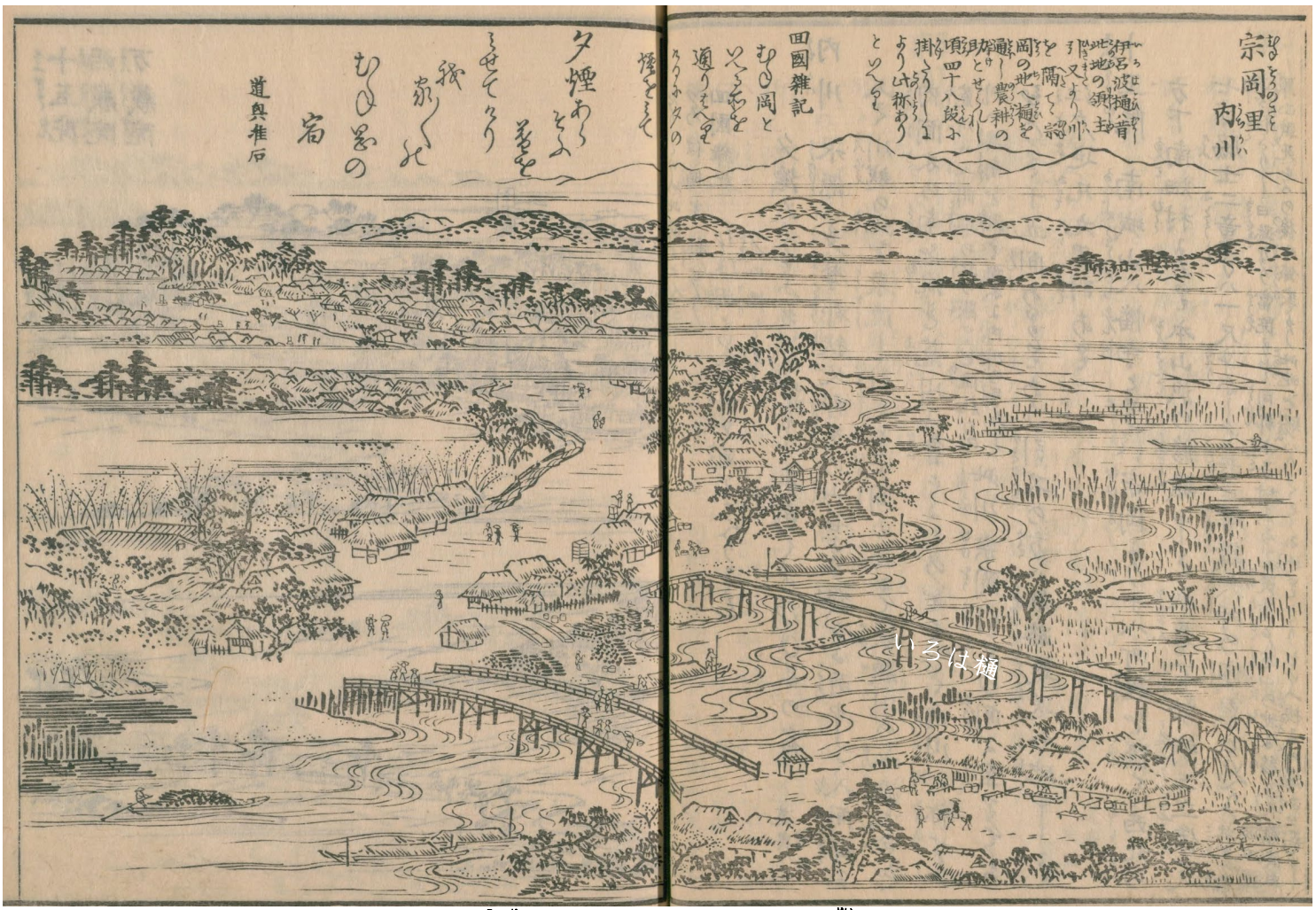
いろは樋　～志木市の暮らしを支えたシンボル～

300年以上にわたって荒川沿いの宗岡の地に野火止用水を引き、多大な恩恵を与えました。



「江戸名所図会」に描かれたいろは樋

いろは樋位置図

大桝と登り竜の復元模型

志木のシンボル「いろは樋」

いろは樋は、玉川上水から引いてきた野火止用水を、現在の志木市の宗岡へ、新河岸川を越えて引くために、新河岸川の上に架けられていました。

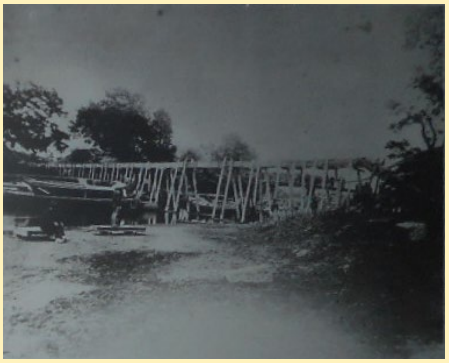
現在、「いろは橋」「いろは商店街」「いろは遊学館」と、志木市には「いろは」を冠した施設や場所がいくつもあります。これは、江戸時代にいろは樋が架設されたことによるものです。

いろは樋から引かれた水は宗岡地区の田畑を潤し人々の生活を豊かにしました。このことが人々の心に深く刻まれ、いろは樋は現代でも地域のシンボルとして生き続けています。

▶ 白井武左衛門により架設

1655（明暦元）年春に完成した野火止用水は、開通後しばらくは、その流末が新河岸川に空しく落ちていましたが、当時、対岸の宗岡地区を領有していた旗本岡部氏の家臣・白井武左衛門は、水に困っていた宗岡地区のこの用水の余水を灌漑用水として導くことにより生産力の増大を図ろうとしました。そして、宗岡地区の一部を領有していた川越藩主松平信綱の許しを得て、1662（寛文2）年に新河岸川の上に長さ約260m、幅と深さ各42㎝余り、水面からの高さ約4.4mの巨大な木樋を架設することになりました。

懸け樋は48個の樋をつないであったために、48文字からなる伊呂波仮名にちなんで「いろは樋」とも、また長さが100間以上もあるということから百間樋とも呼ばれました。この懸け樋が架設されたお陰で、宗岡地区の水田は十分潤うようになり、収穫量も大幅に増加するようになりました。



▶ 木樋から鉄管へ

しかし、木製の懸け樋は洪水の度ごとに被害を受け、その修理にはかなりの出費を強いられました。さらに、長さ約7.2m、幅約60㎝にも及ぶ材木を入手することが時代を追うごとに難しくなってきたため、1898（明治31）年から1903（明治36）年にかけ、総工費1万7千余円で、鉄管を272m余り地下に埋設して、それまでの木製のいろは樋に代えました。

その後、大正末からの新河岸川の改修工事に伴い、いろは樋も再改修を余儀なくされ、全長109m余りの潜管に代えられました。もっとも、この潜管は在来の鉄管を主に使用してあり、不足分は鉄筋コンクリート管で補足、コンクリート製マンホールも2か所増設されました。竣工は1930（昭和5）年3月31日、総工費は3千5百6十余円でした。

架設後に幾度か改修・改造されながら、宗岡地区に多大の恩恵を与えてくれた「いろは樋」も、1965（昭和40）年に市場地内の野火止用水（伊豆殿堀）が下水路として暗渠に改造されたために、その機能と歴史的な役割に終止符が打たれました。なお、このいろは樋に使用された樋の一部が現在も市立郷土資料館に展示されています。

明治36年に埋設された鉄管と流れ出口側の大桝

コラム 江戸時代の石橋「いろは橋」の親柱と供養塔

1997（平成9）年に竣功したいろは橋下の河川敷に昔の奥州街道が通っていましたが、袋状に川に囲まれた湿地帯であったために、わずかの降雨にも往来を絶たれる始末でした。この悪路を直そうと石原弥三右衛門、木下五兵衛、内田市郎兵衛らは、常に道路修理などに尽力を注ぎましたが、頻繁に起こる洪水により通行不能となるため、一念発起し多くの人々の助成を得て1773（安永2）年頃から石橋の架設工事に着手し、1775（安永4）年に長さ8m、幅員3mの石橋を完成させました。この石橋は、いろは樋にちなんで「いろは橋」と命名され、さらに橋の傍らには、人々の通行の安全を願って石橋供養塔が建立されました。永年に亘って往来の助けとなってきた石橋は、新河岸川の河川改修（1931（昭和6）年完成）によって撤去されました。

石橋供養塔と2本の親柱

アクセス

いろは樋の跡
交通：東武東上線「志木駅」下車、徒歩約22分
住所：埼玉県志木市中宗岡1丁目3-43

志木市郷土資料館
交通：東武東上線「志木駅」下車、国際興業バス「浦和駅西口」「西浦和車庫」「宗岡循環」行き、「宗岡小学校前」下車、徒歩1分
住所：埼玉県志木市中宗岡3丁目1-2

いろは樋の跡と志木市郷土資料館

出典　国立国会図書館「江戸名所図会7巻」／
志木市教育委員会「いろは樋の跡」「江戸時代の石橋「いろは橋」の親柱と供養塔」